

私の一文字「起」

副代表幹事
栗原 美津枝

価値総合研究所
会長



「起こす」を常に繰り返してきた

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。今回は、栗原美津枝副代表幹事にご登場いただきました。

栗原 岡西さんがどのように「起」の文字を表現されるのを楽しみに来ました。「走」の下の払いは躍動感と安定感があり、想像以上に力強く書いていただきました。

岡西 資料を拝読し繊細さと力強さを感じましたので、左払いは繊細に右の払いは筆をグッと押し付けるように書きました。「起」という漢字は人が前に進んでいくという意味です。「起」の中の「己」は、蛇が頭をもたげている姿を表しますが、人が起き上がる瞬間に似ていることから人が前へ進む、起き上がる意味に変わっていったといわれています。

栗原 己が走るとおっしゃる通り、そんなポジティブな面と、「起き上がる」という形になる、結果を出すという意味で、「起」は私の大好きな文字です。私は「起こす」ことを常に繰り返してきましたし、これからも「起こす」ことが大切かなと思っています。

岡西 栗原さんが1987年に日本開発銀行(現日本政策投資銀行)に入行された時も、初の女性総合職でしたね。

栗原 私は入行以来、女性初というだけでなく、いろいろな意味で、初期の開拓をしてきました。例えば、2011年5月にできた医療・生活室や、同年11月に立ち上げた女性起業サポートセンターは、前例にとらわれず新しい分野への挑戦として作ったものです。日本人はゼロから1を生み出すことが苦手といわれていますが、このことはすごい力が必

要です。私が「起こす」という言葉がとても好きなのは、その重要性を表現する言葉だからです。女性起業家との出会いを通じ、彼女たちを尊敬していることもあります。「起こす」は起業家の「起」でもありますから。

岡西 新しいことを起こすことでの苦勞は。

栗原 最初だからと云々の苦勞、ということではないんです。日本政策投資銀行の女性総合職1号にしても、「今までは女性はいなかった。これからは違う、ならば門を叩いてみよう」と思いました。女性起業サポートセンターの場合も2011年当時でどう考えても新しい原動力が必要だと思ったからです。私の中で今起こったことは、5年後にはそれが普通になっている。先を見れば自然なことなのです。そう思って当たり前前の決断、行動をしてきたと思っています。

岡西 先を読む力を意識されてきたということですか。

栗原 意識はしませんでした。その時々「風」を感じます。ただ、決断しても動き始めてから形にするまでには苦勞があります。共感してくれる方々の応援をもらったり、自分が楽観的になったり。本当の形にしていくためには、一つひとつ地道にやっていくしかありません。1%の新しい発想と、あとは99%の汗と努力だだと思います。

岡西 栗原さんは今年度から副代表幹事になりましたが、どのような活動を目指されていますか。

栗原 私にとって経済同友会、そして副代表幹事という場は社会や企業などとの新しいつながりの起点であり、起こす機会だと思います。経済同友会が社会に対して起こす団体、組織であるように尽力したいと思っています。



書家
岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。